

佳作

選択課題4 民主主義とは何か

私の中の民主主義

—その実践と課題について思うこと—

福住旺穫
ふくずみ おうじょう(茨城県／翔洋学園高等学校三年)

○. はじめに

一八歳選挙権が施行された二〇一六年に

は、民主主義について様々なことを考えさせる出来事が沢山あった。英国が国民投票により僅差でEU離脱を選択したことは、

Bregret (Britain (英国) と regret (後悔) の造語) という言葉を生んだ。国民は事前にEUを離脱した場合の経済的打撃の深刻さやその影響についての警告と、主に大量の難民を受け入れることによる不安や恐怖感と、多額の税金が投じられる事への不満とを天秤にかけ、離脱を選択した。この決定後に、離脱派の主要人物が訴えた公約が「虚偽」であり、国民は誤った情報に踊らされて投票したことが明らかになったが、離脱派に投票した人を含む四百万人も人が再度国民投票を求める署名と、数万人規模のデモを行ったにもかかわらず、国民投票のやり直しは行われなかった。

米大統領選挙では、"Make America Great Again"の下、政治経験がない実業家のドナルド・トランプが、本音を過激な言葉で修飾し、差別的発言を繰り返しながらも、メディアを駆使し、結果的に勝利した。主に製造業の失速で職を失い生活に困った白人労働者の不満と怒りを煽った「ポピュリズム」の結果だと分析された。この二つの出来事は、民主主義とは何なのか、選挙結果は民意なのか、自分の中で持っていた漠然とした理想像が揺らいだ瞬間であった。

1. 民主主義との出会い

「民主主義」という言葉を初めて意識したのは小学校五年生の時、誕生日のプレゼントに『一〇歳からの民主主義レッスン』という絵本が添えられていた。その内容は当時の私には難解なものであったが、「分かるところから読めばいいよ。」という母の言葉にちよつと苛立ちながらも、色々調べ、教えてもらいながら、一生懸命に読んだことを覚えている。

私は小学六年間をタイ王国で過ごした。子供ながら児童労働や貧富の格差の悲惨さを感じ、二〇〇六年のクーデター、二〇〇八年の国際空港占拠、二〇一〇年暗黒の土曜日等の時として武力・暴力を伴う大規模テロの際に、高速を走るスクールバスの両側の窓から見える立ち上る幾つもの火の手に、平和の大切さを痛感した。これらの経験は、平和であることのありがたさや政治の大切さを意識させ、民主主義を意識させるには十分だった。

さらに、通っていたインター校では、同学年に日本人はおらず、全校生徒を入れてもせいぜい五人。日本の学校とは異なりクラスは国籍も宗教も年齢も異なる生徒で構

成されていた。生活習慣や文化が違えば、おのずと価値観も大きく異なる。民主的な考え方をする先生やスタッフがいる一方で、そうでない人たちも少なくない。歴史的価値観の違いをはじめ、様々な偏見や差別がはびこる環境の中で、自分が自分であるためには、相手の話をよく聞き、自分で考え、それを相手に伝えることが求められた。

学校という社会の中で、自由や平等は与えられるものではなく勝ち取らなければならないものであった。友達と連帯するためには、言葉だけではなく、身振り、手振り、時には絵を描くなど様々な手段を用いてのコミュニケーション。相手の文化や価値観を理解しつつ、論理的に、一歩も引かずに議論することも時には必要であった。スコットランド出身の英語教師はそんな私を“aggressive negotiator”、と呼び、とてもかわいがってくれた。ヨーロッパの歴史やイギリスの民主主義の諸制度について、様々なことを誇らしげに教えてくれたのも彼である。今にして思えば、これが私の民主主義実践の原点である。

二、多数決Ⅱ民主主義？ 学校生活の中で 民主主義と呼ばれたもの

小学六年間をタイで過ごした私にとつて、帰国後の学校生活は戸惑いの連続であった。何より、学活のあり方に疑問というより憤りを感じていた。意見の内容よりも人間関係によつて賛否が分かれる仕組み、議論を嫌い、学活を一刻も早く終わらせることを優先する風潮、学校のため、自分達のためという公益性よりも「うごきたい」「面倒くさい」が優先し、「別にいいじゃん」という事なかれ主義……。疑問や意見を呈すると、その内容に回答するのではなく「文句あるの?」と言われ、気に入らない発言にはブーイングの嵐。「男のくせに女の味方をするのか。」「よそ者のくせに黙っている。」など見当はずれの誹謗中傷も多かった。意見を求めれば、「いいと思います。」「意見なんてない。」を繰り返すのみで、理由と共に自分の意見を言おうともしない。説明を求めたり、異議を唱えれば嫌な顔をされ、クラスの意思決定は終了を告げるチャイムと共に多数決という手段に委ねられる。学活終了後に「場を読め」と凄まれることもあれば、異議を唱えたことが嫌がら

せのネタとなって自分の身に降りかかったこともある。

その一方で、学活中には何も意見しないのに、教室を出るとすぐさま不平・不満を爆発させ、決定事項には従わない者も少なくない。反対ならまだしも、自分が多数派に票を入れたのだから、その決定に従わないことがまかり通ることは驚き以外の何物でもなかった。決定事項が嫌なら、従うことができなかったら、なぜ意見を訊かれた時にそれを言わないのか―理解できなかったし、理解しようとも思わなかった。

「多数決は民主主義だ。」少数派の不満を押さえつける時に繰り返されるこの言葉は、一部教師もよく口にしていた。そんな教師に、「多数決は絶対正しいのですか?」「全員が同じ意見であることは怖いことではないのですか?」「少数意見は無視されて当然のですか?」と反発したことを覚えていいる。学活では意見を言わず、多数決での決定事項に不平不満を唱え、決定事項に従わない、いわゆるさぼる生徒は「仕方がない」で片付けられ、異議を唱え、議論する者は疎まれる、そんな現実は何度も唇をかんた。

今にして思えば、同じ意見を持つ仲間を

集めなかったこと、つまり連帯が欠けていたとの反省もある。しかし、私の中では、人の好き嫌いではなく発言内容をよく考えて自分で判断することは、自分のアイデンティティーに関わるとても重要なことであった。自分で考え、その意見を表明することは重要だという態度を貫こうとボロボロになりながらも私は闘っていた。

自分の意見を言わない人たちが少なくないのは、日本社会にはびこる「暗黙の同調圧力」のためであること、実は議論をけんかや争いと誤解する風潮もあり、避ける傾向があることを意識したのは、随分後になつてからである。時に理不尽な同調圧力であっても、それに屈しない者を「場が読めない」と非難するベクトルに形を変えて攻撃されることは、私にとっては基本的人権の侵害以外の何物でもなかった。

学年が進むにつれ、私の考えを理解してくれる友達は少しずつ増え、いわゆる根回しや、ある程度の妥協点を盛り込んだ提案をすることを覚えたものの、学校民主主義への疑問と私の不満はくすぶり続け、民主的であることの大切さが十分機能していないという失望感からは逃れられなかった。学校という小さな社会の中では、人間関係

に縛られて言論の自由の大切さが軽視され、少数派の意見は時間と無関心という制約の中で疎まれたのだ。十分な議論を経て採決に至ることはまれだった。多数決後に不都合が生じた場合も、議論して修正するのではなく「教師による決定」という形で十分な説明もなく覆されることも、それをさも当然の様に受け入れる人たちの態度にも形容しがたい虚しさを感じた。

一八歳を迎えた今だからこそ、学校は小さい社会であるがゆえに、多様性を認めることよりも、同調圧力に従う事の方が大切であると考えられていることも理解はできる。しかし、その一方で、教師という知識と経験を積んだ大人のアドバイスや指導を受けられる機会だったのにと、民主主義教育を期待して失望したこともまた事実である。

学校は集団生活の場であるから、意見の衝突は当然。暴力は許されるべきではないが喧嘩になってもそれでいい。少数派の価値観を理解し、その意見を聞いて妥協点を探すが、探そうと努める事こそが民主主義ではないのか。私の中の疑問と不満は大きくなっていった。多数決は集団の意思決定手段の有効な方法のひとつであること

は否定しない。しかしながら、「民主主義は『多数決』であり、それを善だと考えるならば、その前提事項があるのではないか。学校での多数決の在り方は便宜的なものにすぎず、必ずしも民主的な方法で行われているわけではない」という疑念は私の頭から離れなかった。私の考えていた学校内での民主主義とは、「互いの意見を戦わせることによって、妥協できる点を模索し、個人よりも全体の利益を優先する」ことだと思っていた。そのため、何よりも大切なのは、「皆平等であること、自分の意見を持つこと、その決定によってひどく傷つけられる人がいないこと」であった。公平で且つ公正であることに何より努めようと思っていた。私の意見を認め、様々な議論に付き合ってくれる少数の先生の存在は、救い以外の何物でもなかった。

当時はこの本の存在は知らなかったが、戦後の一九四八年から一九五三年まで使われていた文部省作成の社会の教科書『民主主義』には「民主主義の根本は……中略……すべての人間を個人として尊厳な価値を持つものとして取り扱おうとする心、それが民主主義の根本精神で」あり、その上で議論（原文：論争）することの重要性が述べられて

ている。無関心・無責任の事なかれ主義が多数派であり、感情で判断することを是とする学校教育は民主主義の実践の場ではなかった。

三、ポピュリズムが生まれる背景

論理的思考よりも感情が優先される――英国のEU離脱と米大統領選でのトランプ氏の勝利以来、「ポピュリズム」は一躍脚光を浴びた。エイブラハム・リンカーンの言葉をもじり「民衆の、民衆による、民衆のための政治をポピュリズムと呼ぶなら、私はポピュリスト」とフランス右翼「国民戦線」党首（当時）マリヌ・ル・ペンに吹き出しがつけられていた朝日新聞DIGITAL 四月二十三日の「ポピュリズム」特集の中で、「ポピュリズムの特徴は、（一）私（たち）こそが、市民の真の代表と主張（二）敵を作る（敵となるのは、具体的には既成政党・マスメディア、官僚組織……と様々）（三）現状への不安や不満、怒りを重視」とまとめられていた。

アドルフ・ヒトラーが頭に浮かんだ。第一次世界大戦の敗戦後、ヴァイマル憲法（ドイツ共和国憲法）の下で民主主義国家を築いたドイツが、なぜ独裁者を生み、第二次

世界大戦へと突入したのか。多額の賠償金の支払いやルール地方の占領、世界恐慌のドイツへの波及による失業者の増大とハイパーインフレによる生活苦に喘いだ国民の強い不満が、強いリーダーシップを求めたのだ。ヒトラーは、ヴェルサイユ体制を批判・ヴァイマル共和国（一九一九―一九三三年のドイツ共和国、ヴァイマル憲法下の国家）に激しい敵意を抱き、巧みな演説を通じてドイツ労働党（ナチス）を台頭させた。

ヴァイマル憲法は、ドイツで初めて君主政を廃止し共和政を規定、男女の普通選挙による議会政治、国民の直接選挙で選ばれる大統領制に加え、世界で最初に労働者の団結権などの社会権を保証した、当時における世界で最も民主的に進んだ憲法であった。にもかかわらず、ユダヤ人大虐殺を招いたヒトラーは、数字の上では「民主主義」によって熱狂的に支持されて独裁という形の権力を握った。当時の最高支持率は九八%、支持者は不満と怒りに満ちたドイツ人、表面的には民主的な方法を用いて権力の座についていたのだ。当時のメディアは主にラジオや映画、激しい身振り・手振りを効果的に用い、短く具体的に分かりやすいスローガンを掲げ演説を行って大衆心理を操

り、画一的な全体主義国家を作り上げ、第二次世界大戦に突入したのだ。長谷川（二〇〇二）は、民主主義が引き起こした問題に共通する現象として、民衆が「理性」を失って熱狂し、何か得体のしれぬ「怒り」にまかせた行動を示すとしているが、まさにその通りだ。

EU離脱を選択した英国国民にしても、米大統領選挙に勝利したトランプにしても、背景には大衆の大きな不安と怒りがあった。

英国の場合、国民の様々な不安の中でも、特に難民問題やEU分担金問題を主要テーマにした一大キャンペーンによって国民は扇動され、専門家、いわゆる知識者の意見や警告は積極的に無視された。米国の場合、有権者の判断を左右した二つの心理的メカニズム―「発見的推論」と「アクセシビリティ」―が指摘されている。「発見的推論」とは、根拠よりむしろ、何かに対する連想に基づいて意見を言うもの。「アクセシビリティ効果」とは、優れている可能性がある情報ではなく、「真っ先に思い浮かぶ」考えを優先することをいい、情報の価値や一貫性よりも、その頻度や最近触れたかどうかが重要な決定要素となる（東洋経済

ONLINE 二〇一六年十一月十二日）。トランプは「Twitter」を駆使、感情と視覚に訴え、様々な駆け引きをしながら現代のマスメディアをコントロールしようとしているように思えた。世界の多くの国では「民主主義」が信奉されている。なのに大統領選では、様々な不安や生活苦に喘ぐ大衆の中でくすぶっていた不満―実際に政治を動かしている一部のエリート層たちが自分たちの利益のためにのみ動いているのではない―に火が付き怒りに変わったのだ。

水島（二〇一六）は、ポピュリズムの三つの問題点を挙げ、「（ポピュリズムは）民主主義が生んだ一つの試練なのかもしれない」と説く。「ポピュリズムそのものが悪いというよりは、ポピュリズムによる決定は、制度や手続きを軽視し、少数派に抑圧的に作用する可能性があり、極端なものになりやすく、少数派を抑圧することが多い」と指摘し、「人々の参加と包摂を促す一方、権限の集中を図ることで、ポピュリズムとデモクラシーの関係は、両義的といわざるをえない。」と述べている。

「民主主義は道具だ。何を決めるかではなくいかに決めるかについての、不完全で欠陥の多い、しかし、今のところこれに代

わるこれ以上のものがないと思われている、道具である。」（上野千鶴子「民主主義という道具をつかいこなす」『一八歳からの民主主義』）それ故、上野は次の二つのこと―（一）どんなに民主的に決められたことでも、困ったこと、間違ったこと、愚かなことを決定する可能性はいつでもあること。（二）民主主義は道具だから、使い方に習熟しなければならぬし、使わなければ錆びる、ということ―を念頭に置いておいた方がよく、さらに「民主主義は欠陥の多い道具だから、いろんな人たちがいろんなしかたで、試行錯誤しながら道具を精錬している」と述べている。

つまり、私達はどうすれば民主主義を使いこなすことができるのか、感情的な政治判断をしないようにするためにどうすればよいのかを考えなければならないということになる。

四 民主主義を使いこなすために―情報という観点から―

現代社会は情報過多の時代であると言っている。トーマス・ジェファソン（米國三代大統領）は「健全な民主主義には『情報を与えられた有権者』が不可欠である」

と説くが、ジェファソンのいう「情報」とは、事実に基づいたものであり、根拠のないうわさやデマなどの無責任な内容のものを含んでいるわけではない。ここでは特に、民主主義を使いこなすための情報という観点について考えてみたい。

新聞やTVのような公共メディアに加え、IT技術の進歩と利用拡大により、私達一人一人が、多くの人に向けて情報発信できるようになった。LINEやFacebookやInstagram等々のコミュニケーションアプリによる情報発信により、我々は同じ考えを持つ人達と議論を深めたりできる一方で、都合の良い情報ばかりを集めて異なる考えを持つ人達を排除し、視野を狭くし、過激な決定をしてしまう危険性も併せ持っていることを理解して使用する必要がある。「いいね」を集めるために視覚に訴えウケ狙いに走る内容や重箱の隅をつつくような非難・中傷、ネット上での炎上を煽ってはいけない。情報倫理に則ったものを発信することが大切だと自覚しなければならぬのだ。そうでなければ、自分の意見を公表することを躊躇する人が増えてしまう。その一方で、情報の発信元とその内容に注意を払い、その情報が真実か否かをあ

る意味では疑いながら、コミュニケーションツールを楽しむことが非常に重要なのだ。

また、トランプ大統領の就任以来、「フエイクニュース」「オルタナティブファクト（事実に対するもう一つの真実―実用日本語表現辞典―）」という言葉が時折聞かれるようになったが、マスコミには、ファクトチェックをお願いしたい。そもそも、マスコミの存在意義に立ち返れば、視聴率を意識した映像はええるニュースよりも、有権者が自分の意見形成の判断材料となるような情報を発信することがより重要だと理解していただけたと思う。英国でEU離脱に大きな影響を与えたキャンペーンの内容が虚偽であったにもかかわらず、その発覚は投票後となり、誤った情報に踊らされた多くの有権者は、自分の決定を取り消すことはできず、また国民投票のやり直しも行われなかったことを教訓にしてほしいのだ。

五 おわりに

理想の民主主義の形があるのか否かは今の自分にはよく分からない。時代と共に、求められる民主主義の形が異なるのではな

いかとさえ思う。日本においても、貧困・格差は社会問題になっており、特に子供と老人の貧困は大きな社会問題となっている。さらに、福島原発関連問題、地震や豪雨等の復興支援等々、困っている人、支援が必要な人の数はおびただしい。

しかも、複雑化していく国際化の中で、自国だけ良ければそれでよいというものでもなく、全世界に目を向ける必要がある。民主主義の重要性は、時代に応じた修正を加えながらも、ますます重要になってくるだろうことは疑う余地はない。

私たち日本人にとつての民主主義は、ヨーロッパとは異なり、闘って勝ち取ってきたものではなく、明治維新以降、様々な運動がみられるものの、戦後、半ば与えられたものである。民主主義が日本国民に紹介された当時、皆が民主主義の理想とそれがもたらすものに夢を抱いたことだろう。前述の文部省著作教科書『民主主義』には「民主主義の理想は人間が人間たるにふさわしい生きがいのある生活を営み、お互いの協力によって経済の繁栄と交流を図り、その豊かなみのりをすべての個人によって平和に分ち合うことができるような世の中を築いていくにある」とし、「自頼の精神こそ、

日本国民の将来のために民主主義が何をもたらすかを定める第一の鍵」「(日本の将来の希望)は、今まで人類の経てきたいろいろな経験を生かして、討論しつつ、実行し、実行しつつ、討論する、国民すべての自主的な意志と努力とのうえに輝いている」とある。時代は変わっても、民主主義に対する私達の心がけという観点から読めば、現代社会でも全く古くなく、かえって忘れかけていた大切なことを再確認させてくれる。

これからの人生の中で、民主主義の実践はまだまだ続く。人間尊重という大原則を大切にしつつ、自らの意志で情報を収集し、判断する能力を身に付ける努力と共に、どんな状況下であっても扇動されることなく、且つ自己の経済的利益や都合を優先させない公正な眼で判断し、自己決定ができるよう、努力を怠らずに生きていきたい。

参考文献

池上彰『これが日本の民主主義』集英社

二〇一六年

石崎学『デモクラシー検定』大月書店 二

〇〇六年

岩波新書編集部(編)『一八歳からの民主主義』岩波書店 二〇一六年

日下公人『人はなぜ戦争をするのか』三笠書房 二〇〇〇年

サッサ・ブルーグリーン(絵と文)にもんじまさあき(訳)『二〇歳からの民主主義』

義レックス 明石書店 二〇〇九年

高田博行『ビトラー演説』中公新書

長谷川三千子『民主主義とは何なのか』文

春新書 二〇〇一年

水島治郎『ポピュリズムとは何か』岩波書店 二〇一六年

文部省・西田亮介『民主主義(一九四八―

五三) 中学・高校社会科教科書エッセンス復刻版』幻冬舎新書 二〇一六年

朝日新聞DIGITAL「大衆迎合、なぜダメ?」

ポピュリズムと民主主義のちがいは「二

〇一七年四月二三日

withnews「ポピュリズムって民主主義と

何が違う? 知っておくべき『五つのこ

と』二〇一七年一月五日